

水口幼稚園 木製アスレチック遊具「冒険の森」

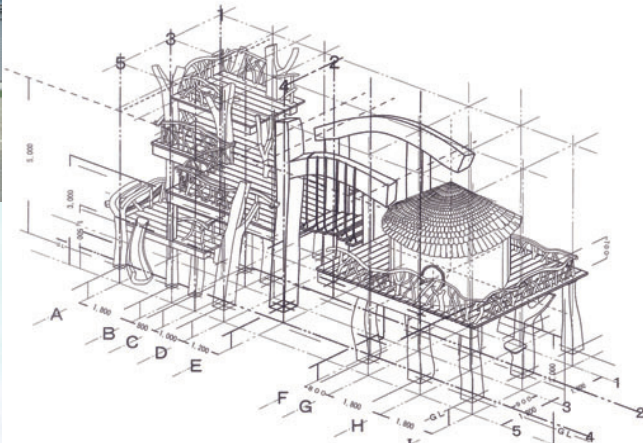


「作る」という事とは？を幼い時から知る木製遊具

ワリアム・M・ウォーリス設計の教会付属の小さな幼稚園に、2010年4月に完成した迫力ある木製遊具である。地上高5mの「かぜのとうし」、地上高3mの「ひだまりのいえ」、それらを結ぶ吊り橋「にじのはし」により構成され、登り橋、縄梯子、曲がり木の滑り台、クライミングウォール、送話管等で遊ぶ事で自然と身体機能が向上するように、施主様、職員の意見を取り入れている。

常に雨曝しになる為、仕口、継ぎ手ではなく、通し柱とログビルディングにおけるノッチ組みを採用。自然木の形状をそのまま活かしたデザインになっている。材芯を求める事ができないため、仮組みの際、まず柱を立てた後、桁の水平を求めるためにジャッキアップするという方法で仮組みを進めている。子供達の体力低下を懸念する施主様の思いから、このような規模の遊具となったが幼保向けの遊具では高さ3mの吊り橋は異例中の異例である。

原木は腐朽に強い栗の木を滋賀県内、東北各地から集めた。平均末口34cm。独特の形状は、総てチェーンソーにて製材している。



便宜上、図面を作成するが、必ずしも図面の通りにはならない。特に必ずといっていいほど通り芯がずれるので、あくまで計画を進める上での参考値に留める。柱にはH型钢で作った接続金物を取り付け、鉄筋との溶接で、基礎との結合をしている。



施主様のツリーハウスが欲しいとの要望に思い浮かんだのは円筒形の土壁の小屋。木製遊具に土壁など国内外にもあまり例がないのではないかと。しかも土壁なら子供達も作る事に参加できる。

幼少期からモノを作る面白さを知って欲しい。そんな思いも込めて提案した。実際、コテ削ぎの上手な子供達が数人いて「これ、おもしろーい！！」「面白いから一日中やっていたい！」と。全国の左官職人に聞かせたい子供達の素直な言葉。

屋根材も本体工事の際に発生する栗の木の端材を割って作った木端葺き。栗のコワ葺きのように薄くはなく、シーダーシェイクのような使い方になっている。

仮組みを行った甲賀市内の工場にも、保護者の協力を得て、何度か園児たちを招待した。そして今回もまた数人の子供達が「オレ、将来、大工になる！」と純粋な気持ちを発していた。

曲げ木家具等のスチームベンディングを利用した木製クライミングウォール

通常、クライミングウォールはFRP等で構成されるが、この物件にそれらの素材は似合わない。また構造が曲がった原木のため、直線的な板や角材より、このようなデザインを提案し採用された。一枚のバネにオーバーハング、垂直、傾斜という形状を取り入れる事が可能である。屋外構造物において、この技術を活用した例も、国内ではあまりないのではないかと。クライミングホールドは本体工事の際の栗の木の端を使い、甲賀市在住のクライマーでもある木工家に発注。

幼い子供達が背伸びをし、揺んでよし登る行為は、身体能力の発達に良いという報告がされており、クライミングウォールは最適な教育遊具である。木材を自在に曲げる技術は、デザイン性の幅も広がり、屋外の構造物においても、今後の可能性も広がる。

自分たちの遊び場を、大人たちが真剣な顔をして作っている。そんな後ろ姿も見せたいものである。